慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	私と経済学の研究
Sub Title	Economic studies for me
Author	富田, 重夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1991
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.84, No.特別号-I (1991. 9) ,p.1- 12
JaLC DOI	10.14991/001.19910901-0001
Abstract	
Notes	富田重夫教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19910901-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「三田学会雑誌」84巻特別号—I（1991年9月）

私と経済学の研究

富田重夫

昭和18年4月，第二次世界大戦におけるわが国の緒戦の大勝にもかかわらず，すでに決定的にわれに不利な戦況に傾きつつあったその時期に，慶應義塾大学経済学部予科に入学して以来，平成3年3月に定年退職をするに到るまでの約半世紀にも及ぶ義塾における自分自身の学生として，教員として，そしてとりわけ研究者としての生涯を回顧しながら，その一端をここに書きとどめようと思う。

少しく遠い過去にさかのぼるが，小学校6年の5月まで約2年間大阪で暮した私は，父の仕事の関係で急遽東京のある有名な（今日でも）小学校へ転校することになった。4回目の転校であったから，転校それ自体にはほとんど抵抗感はなかったのであるが，この小学校では6年生の教科書はすべて5年生のうちに履修し終えており，私が入った時には毎日中学入試のための模擬テストに明けくれているのを知って，さすが日本の首都東京だと驚き，かつ入学試験というものの激しさ厳しさを初めて味わうこととなった。余談になるけれども，今日，小学校をはじめとして各段階での入試そのものや，そのための準備の激しさや，あるいは無意味さが問題とされているけれども，少なくとも昭和の初期において事情はすでに右の如くであった。幸に希望する中学に入学することができたが，すでに日支事変は始まっており，やがて独ソの開戦に続いて，あの真珠湾攻撃とともに，わが国も大戦に突入することとなり，学園生活にもきな臭い香が一段と強く身に迫ってくるのを感ずるようになった。

18年の春の高校入試において，第一志望校に失敗し，いわゆるすべり止めとして塾の予科（現在の高校）に入学することになった。当時はすでにいわゆる浪人生活さえも許されなかった。正規の生徒以外は軍需工場などへ徴用されかねない情勢であったのである。高校入試の段階であるから，まだ自分の将来について向かうべき方向がはっきりと決まっていたわけではなかった。中学時代の化学の実験において，あのリトマス試験紙の変色の鮮明さに異状なまでの魅力を感じ，その方面に向かおうかとも考えたが，当時，理工系へ進むのは兵役のがれになりえたことから，逆にその気になれず，他方その頃の旧制高校生の蔽衣をまとってデカンショ節（いうまでもなくデカルト，カントとショーペンハウエル）で酔いしれる姿にあこがれ，これらの哲学者の名前から哲学方面に進もうと考えたりもしていた。もし現在のように浪人生活が許されていたら，私の一生は現在とは全く違ったコースを辿っていたかもしれないであろう。少なくとも確かなことは，そしてそれは決して自慢

になることではないけれども，慶應義塾は，そして慶應といえば経済学部という当時の単なる世評に従って入り，学ぶことになった経済学の勉学，研究というものは，その出発点において，私にとっては極めて偶然的なものでしかなかったということである。そしてこの偶然性のために，その後，とりわけ経済学を職業とするに到ってからは，その研究生活のなかで，つねに，もちろんたえず明確に意識されていたわけではないけれども，暗黙のうちにも，「何のための経済学の研究なのか」という疑問を十字架として負うことになったように思う。もっとも入学試験に限らず，世の中のことは一般的に，わが経済学が教えるようには意識的，合理的に選択的行動をしているとは思われない。事後的にはいろいろと動機付けをすることは可能であり，如何にも明確な意識的行動であるかの如くにいう場合，あるいはいう必要のある場合もあるであろうけれども，偶然的な要素あるいは慣習的，惰性的要因の影響も決して否定しえないところである。M・ウェーバーの価値合理的，および目的合理的行動は確かに人間的行動であるとしても，これらの行動が果して現実の人間の行動のどれほどをカバーしているかを考えるとき，私の経済学研究への道もそれほど例外的ではないと思われる。とはいえ経済学を学び，さらに職業としてこれを選び，これを他の人にも教えるともなれば，これを学ぶことの意義，価値をどこに求めるかということは避けることのできない問題である。しかしながら問題意識は強くあっても，後に述べるように私においてはこの心の空白は容易にはこれを満たすことができなかったのである。

日吉の予科時代，そして戦後復員してからの三田の大学時代，それは現在の学生には全く想像を絶するものであった。一日に1，2時間しか開店しない喫茶店では，一杯のコーヒーにありつくことも容易ではなかった。またスポーツその他の娯楽に接する機会も極めて制限されていたから，学生の本分たるべき読書に過ごす時間は十分にあった。ただ書籍を手に入れることは非常に困難であって，著名な著書の発刊が予告されると，早朝から書店の前に行列して待ったものであった。しかしこのような入手の困難さが，逆に読書欲をかり立ててくれたのかもしれない。特に予科時代は，授業としては第2外国語と微積分の数学ぐらいしか，予習，復習の必要性を感じなかったから，図書館で時を過ごすことが多かった。丁度その頃，先輩の一知人が学徒出陣に当って，もう読む機会がないかもしれないといって贈ってくれた一冊の書物があった。それは西田幾多郎著「無の自覚的限定」であった。その後今日に到るまでの自分の生き方，そして学問上の考え方を，現在から回顧し，しかもこの書が如何に決定的な影響を私に与えたかを思うとき，少しく大げさな言い方をすれば，それはまさに運命的な出合いといってよいのかもしれない。当時「西田哲学」という名前はすでに著名なものであったが，私自身はその内容についてまだほとんど白紙の状態であった。最初のうちはこの書をひもといてみても，まずその耳慣れない用語に困惑することもしばしばであった。600頁におよぶこの書は，これを一読したが，ほとんど理解できなかったというのが正直なところであった。しかし奇妙なことに何か魅せられるものがあり，二回三回と読み返すこととなり，やがては同氏の処女作「善の研究」をはじめとして，他の著書にも深入りすることになっていった。今もってその哲学体系は，その全体像はともかく，個々の部分については自信をもって理解しえたと

言えないことも多い。例えば宗教の問題とは「在所に迷うこと」というのはどういうことを意味するのか，その解釈に迷う。しかし現在の私自身の立場からふり返って見るとき，決定的と思われる三つの思想をその哲学から受け取っていた。まず第一は対象的事実と主体的事実の区別，第二は事実（存在）と意識の関係，そして第三は「私と汝」，つまり個と全体の関係にかかわるものである。これらについて順次若干の説明を加えよう。

周知のデカルトの「我思う故に我あり」，——西田哲学では「我行う故に我あり」——という命題は，疑おうと思えばいくらでも疑うことのできる事実，すなわち対象的事実と，疑う自己のあることを疑いえないという主体的事実を明確に区別するものである。対象論理の支配する世界と主体論理——西田哲学では場所的弁証法の論理といわれる——の世界の区別，そしてこの区別が科学と哲学の相違に相応することを意味する。もちろん何が科学であり，何が哲学であるかは，これらの言葉の定義の問題であるかもしれないけれども，しかし少なくとも従来の経済科学の取り扱ってきた問題，あるいはその取り扱い方，すなわち経済分析の手法は，この対象論理の世界に属している。その意味でこれは疑おうと思えば疑いうる事実，甲論乙駁の世界であり，そして対象論理であるから，三角形は三角形であって，決して円形と同じではありえない世界である。これに対して疑って疑いえないという意味で確実な知識の世界は，主体の論理が支配し，Aは対象論理的には絶対に相反する非Aと自己同一でありうる（いわゆる絶対矛盾の自己同一といわれるものであるが，そのより具体的な意味は，後述の「私と汝」の関係についての論議を参照されたい）。そしてこの後者の世界が哲学の問題であるとすれば，いわゆる科学哲学が，少なくともその発展の初期の段階で，科学の哲学以外の哲学を形而上学として否定し去ろうとしていたとすれば，その論議には賛同しがたいものがある。しかしそれは別として，私はもちろんこの前者，すなわち対象認識の世界を単に価値のないものというのではないのであるが，自らの求めようとしているものはそこにはなく，むしろ後者の主体的認識の方向にあったのである。そのために自らの主たる研究は対象認識としての経済学の研究ではなく，少なくともそれは二次的なものでしかなかった。そしてまだしも経済哲学，ないし経済学方法論といわれるものの中に，主体的認識の可能性を追い求めることになったのである。

第二の論点，すなわち事実と認識，存在と意識の関係について述べよう。このような哲学上の大きな問題を簡単に論ずることはもちろん不可能なことではあるけれども，一つの比喩的説明によって考えてみよう。今日の時点においてはまだ発見されていない南海の孤島は，発見されていない以上は存在するとも，存在しないともいえないという意味で単なる無（nothing）でしかない。そして一年後，たまたまある航海者によってその島が発見され，調査の結果，それは一年前の今日の時点においても，すでに存在していたことが明らかになったとしよう。さてこの島（存在）とその発見（意識）の関係を如何に解するかである。ある人びとは島は発見されようと，発見されなかろうと，すなわちそれが意識されようと，されなかろうと，それは今日の時点においても存在していたのだというであろう。島（存在）は意識から独立に存在すると主張する。総じて唯物論者，あるいは実在論者がそれである。それに対して他の人びとは，意識は決して存在（島）を作り出すことはできない

けれども，意識に触れない存在は単なる無にすぎず，たまたま発見され，意識に触れた時点においてはじめてそれが古くから存在したと言いうるだけであると主張する。もし唯物論者に対するものを観念論者というのであれば，これをそう呼んで差しつかえない。そしてこの立場に立つならば，存在，あるいは事実といっても，それは意識によって見られたもの，場合によっては意識あるいは何らかの操作によって変容されなければ見い出しえないものであって，全く意識から独立な存在，事実というようなものはありえないことになる。理論負荷的事実といわれるのはこれをもの語るものである。われわれは経済学の研究においても，このような事実の性格を示す多くの事例を挙げることができる。消費者物価の動向を推測するにしても，これにどのような品目をとり入れるのか，またそれらにどのようなウエイトを付けるのかによって，もちろん結果は異ならざるをえない。人的分配は不平等であるといっても，これをどのような尺度で測定するのかによって，その不平等度は異なり，いずれがより平等か，あるいはより不平等かも，少なくとも論理上は全く正反対の結論に達することも可能である。あるいはまた変形自在（malleable）な資本財を仮定して技術進歩を考えるのか，それともいわゆる体化された（embodied）技術進歩を考慮した生産関数によって推論するのか，によって，計測される技術進歩の経済成長に対する貢献度も，あるいは分配率を規定するいわゆる代替の弾力性の値も全く異なるものとなることが示されている。このように事実といっても，あるいはこれを測定する尺度に依存し，あるいはこれを解明するために仮定される理論に依存せざるをえないと考えられるが，これとの関連で極めて重要なことと思われるのは，以上のような事実とは如何なるものかという問題は同時に，これを裏返えせば，理論とは如何なるものであるべきかという問題であるということである。科学哲学においていわれる実在主義的理論観とコンベンショナリズム（規約主義的理論観），あるいはK・ポッパーの道具主義的理論観の対立，これを経済学に則して考察するとき，J・S・ミル，J・N・ケインズやT・W・ハチソンの経済学方法論に代表されるような，イギリス伝統の経済学の経済理論観と，C・メンガー，L・ロビンズやM・ウェーバーに代表される大陸限界主義の経済学の理論観の対立，がある。しかもこれらの対立をもっとも端的に示す論点は，理論の真偽は如何にして決定されうるかという問題の中に，これを見出すことができる。実在主義の立場の人びとは，理論の真理性は経験的テストによって経験的事実と照応することにより，検証（verification）ないし確証（ポッパーの corroboration）されると主張する。他方規約主義の立場の人たちは，理論とは仮定と含意の理論的に矛盾のない思想像であり，したがって論理的に整合的であるかぎり真であり，経験的事実はなんらその真理性を根拠づけるものではなく，むしろ逆に理論によって経験的事実が説明されうるのであり，その意味で理論は適用されなければならないと考える。このように対立的な見解が出てくるのは，結局のところ，前述するように，事実は意識から独立であるかどうかに依拠している。実在主義の立場のように理論の真偽を経験的事実によって確められるというのは，事実は理論から独立であると考える故に可能なのであって，もし事実そのものがもともと理論に依存して確立されうるのだとすれば，そのような事実によって理論の真理性を確立するというのは無意味なはずである。以上のように経済学をも含めて科学一般

について，その理論観を二分するといっても決して過言ではないこれらの二つの立場の対立は，前記した南海の孤島の問題を如何に考えるかにかかわっているのである。私自身は意識されないものは単なる無であるという西田流の思想を採ったということが，今日の自らの経済学方法論上の立場を決することになったと思っている。

第三の論点，すなわち個と全体の関係に移ろう。前掲の「無の自覚的限定」の中で，「私と汝」という論稿があり，当時，私がこの著書の中で最も興味をもったのはこの論稿であった。その要点はつぎの如くである。私と汝，すなわち各個人はそれぞれ世界に一つしかない存在，他によって絶対に代替しえないものとして，真に独立した個人でありうる。私は私であって決して汝によってとって代られうるものではないし，汝もまたそうである。その意味では私と汝とは絶対に他者であり，Aと非Aの関係にある。しかしながらもし世界に私なら私，汝なら汝しか存在しなかったとしたら，そのいずれも個人とはいえないはずである。私が個人でありうるのは絶対の他者であるべき汝という個人の存在が前提されなければならない。個は他の個に対して個なのであって，ただ一つの個というのは，実は個ではなくて，全体そのものである。いわゆるロビンソン・クルーソーの経済は通常は単一の個人の経済を意味するものと解されているけれども，本質的にはそうではなくて，全体そのものにすぎない。このように相互に私は私，汝は汝であって他者ではないという意味で個人であるのに，自己の存在の根拠が絶対の他者の存在にあるということが私と汝の在り方であり，絶対矛盾の自己同一といわれたものである。Aと非Aは矛盾するものであるにもかかわらず，両者の自己同一を主張するものであり，主体の論理としての場所的弁証法の論理の真髄をここに見出すことができる。この矛盾の自己同一という主体的事実を基礎にして考えるならば，クルーソー物語の個人の経済分析に基づくいわゆる原子論的，方法論的個人主義的，あるいはまた要素還元的といわれる分析の立場は，個の存在の根拠が絶対に他者である個の存在のうちにあることを忘却しているという意味で，抽象的といわなければならない。またこのような立場に対するものが，ホーリズム（wholism）といわれるものであり，経済学に関連していえば，かつてのドイツ歴史学派の有機体説的思考や，今日の制度学派の思考にもっともよく示されているものであるが，それは相互に個と個は絶対の他者であることを捨象しているという意味において，これまたその抽象性は免れえないと思われる。しかしこれらのいずれの分析的立場における一面性，抽象性も，それらが科学的認識における立場である限り，すなわち前述するように対象論理に支配された認識としての科学的分析の立場である限り，避けがたい結果であるといわなければならない。何故ならば，対象論理の世界ではAはAであって，決して非Aと自己同一ではありえないからである。ここにもっとも基本的な意味で近代科学の立場の限界があることを指摘しなければならない。そして現代のように，近代科学の技術的勝利に酔いしれている時においてこそ，この科学の限界の明確化とその認知は重要性を持っているといわねばならない。と同時に対象論理の世界に立つ限り，以上の二つの分析的立場はいずれもその存在理由を持ち，そのいずれか一方でもってこと足れりとすることはできないであろう。今日，少なくとも経済理論の分野ではアトミズムが優位を示していると思われるけれど

も，そしてまたドイツ歴史学派は崩壊したとしても，そのホーリズムは決してなくならないし，またなくなってはならないものである（なお以上の個と全体の関係に関連して，イギリス・ケンブリッジ派に見られる「代表企業」による分析手法は興味ある立場を形成していると思われるが，別の機会に譲りたい）。

以上に考察してきた三つの問題，――対象的事実と主体的事実，事実（存在）と認識（意識），および個と全体――についての私なりの思想の根源は学生時代に培われてきたものであって，私にとってはいわば三ツ児の魂百までに相当するものというべきかもしれない。もちろんその当時においては，これらの思想が，経済学の限界とか，経済理論の検証問題とか，あるいはまた原子論的分析の意義や評価などに，どのように関係してくるかは知るよしもなかったことであり，それは今日からの回顧において明らかにされるものであったことは，付け加えておかねばならないであろう。

話は変るが，敗戦後間もなく，いまだに悲惨な世相の中で学生生活をエンジョイするといった気分も機会もないままに，昭和23年春，大学を卒業し，やがて経済学部に奉職することとなり，たとえ職業としての経済学であろうとも，学生時代とは異なって，経済学とのより密接な交流を求めて行かざるをえない立場におかれるようになった。最初に研究対象となったものは，左右田喜一郎氏の「経済哲学の諸問題」であった。彼は生粋のカンティシャンであったから，「先天的綜合判断であるべき経済学的認識は如何にして可能なりや」というのが，その経済哲学の基本問題であり，したがってそれは認識論としての経済哲学にほかならなかった。それは本来的に哲学であって，経済学はいわば刺身の具でしかなかった。これに対して200年にも及ぶ経済学の歴史をふまえて，現存する経済学に密着しながら，その認識に関する問題を取り扱ったものとして最初に興味をもったものは，L・ロビンズの「経済科学の本質と意義」なる著書であった。その中で，とりわけ経済学の定義として，経済学を二分する物質主義定義と稀少性定義に関する議論は，それが単に定義の問題として済されるものではなく，実は極めて多くの方法論的問題を内包していることを知らされた。例えばこの二つの定義における経済概念が，一方はアリストテレスの実体概念であり，他方はE・カッシラーの関係概念であること，すなわち経済学において用いられる諸概念の特質にかかわる問題のあること，あるいは稀少性定義に見られる価値中立性の立場は，周知のウェーバーの没価値性理論に外ならないし，さらにまたその方法論的個人主義の立場はメンガーの原子論，さらにデカルトの要素還元的分析にさかのぼること，加えてその「内省」の原理はウェーバーの「理解」の方法，ハイエクの内省の論議に関係し，さらにこれは科学論における大きな問題，すなわち自然科学に対して社会科学，文化科学に特有の方法が考えられるべきかどうかという問題に関連するところから，いわゆる新カント学派の文化科学論，とりわけ一般的因果律に対する個別的因果律や，価値関係的方法にかかわる議論が考察されなければならなくなってきた。と同時にそれと対照的に物質主義定義に結びつくJ・S・ミルからJ・N・ケインズなどに到る経済学方法論の立場の究明の必要をあらためて痛感することとなった。いずれにせよこのように多くの問題の所在を知らしめることになったロビンズの定義の問題に関する研究は，私の，活字となった処女作の論文「物質主義定義と稀

少性定義の思考様式における差異」として「三田学会雑誌」に掲載され，これを契機として，一本の苗が枝を出し葉を繁らせるように，多方面に研究を拡張していくこととなった。そしてこれらの多方面にわたる暗中模索の研究から，一方では経済学，経済学方法論，科学論，そして認識論といった各研究領域のそれぞれの課題と特質，さらにそれら相互の関係と位置付けを明らかにし整理するとともに，他方経済学にはこれまで多くの学派が存在してきたし，また現に存在しているが，いわゆるマルクス経済学は別としても，イギリス伝統の経済学と大陸の限界主義の経済学とはその内容と形式の両面から区別して考察されるべきであること，さらにこれはかなり後になってから知るようになった事がらであるが，科学哲学における科学一般についての議論から，これらの対立が単に経済学に特有なものではなく，諸科学において広く見られるものであり，それ故にそれなりの論拠をもつものであることを確信するようになった。

ところでJ・S・ミルが都市と城壁の比喩をもって，経済学的研究とその方法論的研究の関係を明らかにしたことは周知のところである。そのいおうとしている趣旨は，経済学の研究は，それに先立ってまずその方法が確立されてから，その後でなされるものではなく，むしろそれとは逆に，始めにある程度の経済学的な研究が成就された後で，これを整理統合して，その研究のあるべき方法が明確化されるのだということである。それは，経済学方法論は実際になされている経済学的研究の反省の上になされるべきものであって，単に超越的に方法論議が先行されるべきものではないということである。論理上の論拠は別として，実際の事実上の経過を見れば，ミルの主張は経済学およびその方法論の歴史の示すところであり，何よりもミル自身の方法論がA・スミス以来のイギリス古典学派の方法論的集大成を意味していることによっても証明されている。そこでこのような主張が正しいとすれば，私自身の経済学方法論の研究は私自身の経済学的研究に先行し，これに超越的であったのではないであろうか。学生時代はもちろんのこと，大学にのこるようになってからも，今日のように著名な人たちの経済学のダイジェスト版というようなものは極めて限られていたから，これらの経済学者たちの著書をたとえ邦訳されたものであろうと，直接に読まざるをえなかったことは，かえって幸いであったのかもしれない。スミスの「国富論」，リカードの「経済学および課税の原理」，マルクスの「資本論」，メンガーの「国民経済学原理」，マーシャルの「経済学原理」，そしてケインズの「一般理論」，ヒックスの「価値と資本」など，その理解の程度はとも角として，学生時代から接していたものであったけれども，当時それらはただ有名なものを手当り次第読むといった類いのものであって，自分なりに何らかの特定の問題意識をもって系統的に読みこなしていくといったものではなかった。ミルの比喩は，私の方法論的研究が地に足をつけて進むためには，経済学的研究の不可避なことを教えてくれた。と同時にとりわけ私にとっては，始めに述べたように，経済学的研究への出発が極めて偶然的であったただけに，まさに暗黙の裡にも心の空白となっていたものを埋めるべき問題がここにあることを示唆してくれたのである。すなわち経済学的研究を行う積極的理由，その動機は何であるのか，過去の著名な経済学者たちにおいて，それは

一体どういうものであったのであろうか。このような問題が焦眉の急の問題となってきた。

さてこの問題に対する一つの解答はマルクスの中に見出される。青年マルクスはヘーゲルの観念弁証法の哲学やフォイエルバッハの唯物論などの哲学的研究に従事し，周知の唯物弁証法，とりわけ唯物史観という独特な哲学上の立場に到達した。この思想はいうまでもなく，人類の歴史，社会の土台は経済であり，この下部構造の上に，宗教，道徳，芸術，政治，法律などすべての上部構造が成り立っている。後者が前者に影響を与えることはあっても，基本的には前者が後者を規定し，左右する。したがって歴史の変革はまず土台たる経済構造の変革にともなって，その上に立つ一切の上部構造が一新されることによって成就される，というのである。このような思想に達することによって，やがて彼はこの歴史の土台たるべき経済の研究に没頭することになり，大英図書館にとぢこもることにもなった。もしこのように理解することが正しいならば，たとえ唯物史観の是非は問題であろうとも，経済学的研究への一つのありうべき筋道がここに示されているといえよう。しかしながらすでに南海の孤島の例で述べたように，私自身は唯物論の立場を採ることはできなかったから，マルクスの生き方は，たとえそれがどんなに筋の通ったものと考えられようとも，一つの可能なものとして理解しうるだけであって，これに従って行くことはできなかった。

経済研究を動機付けるもう一つの道は，マーシャル，ピグーに代表される立場，「ロンドンの貧民窟」の主張の中にこれを見出すことができる。すなわち人は個人的利害の関心から経済研究を始めるのもよい。あるいは著名な経済学の著書に興味をひかれてこの研究に入るのもよい。しかし重要なことは，ロンドンの貧民窟を歩いてみて，自分と同じ人間として生れながら，ある人たちが如何に悲惨な生活状態に置かれているか，その原因は何であり，またそれを救済すべき手段は何であるか，を考える社会的情熱をもつことであるという。この暖かい心（warm heart）と科学の求める冷静な頭脳（cool head）によって厚生経済学が形成される。しかもこの経済学はいわゆる功利主義の哲学に立脚し，この哲学の求める快楽（pleasure）と厚生経済学の求める厚生（welfare）と経済学における効用（utility）の三位一体の中で，経済と道徳の相応の関係を見出し，経済的厚生の追及に経済研究の意義と経済学者としての生き甲斐を求めるものであり，その立場は，経済学の歴史において見出される一つの主要な潮流であるとともに，経済研究を動機付ける可能な一つの立場といえるであろう。しかしながらこの功利主義の倫理は，たとえそれ自体の発展のあったことはもちろんのことであるとしても，その基本的な特質において，すでにカントの形式倫理の批判を免れえないと思われる。もしそうであるとすれば，このカント的な観念論的形式主義の立場において経済はどのような位置を与えられるか，そして経済と倫理はどのような関係にあると考えられるのであろうか。ここでは経済は所詮手段価値以上に出るものではないであろう。メンガーのいうように経済の本質は欲望にある。これを稀少な手段で充足しようとする行為と，それが生み出す現象が経済学の対象となることは，稀少性定義の教えるところである。これに対して形式倫理の立場においては，倫理とはかくあらねばならないことを意味し，単にかくありたいものとは次元を異にする問題と考えられる。前記の快楽＝厚生＝効用の図式に対して，たとえ経済の問題はそうであっても，場合に

よってはこれらを否定してでも，かくあらねばならないものを求めるところに倫理の問題があるということである。このように経済と倫理の関係を考えるとき，経済学は倫理的価値判断に対して中立的であるというのは，両者を和解させる，すなわち両者を矛盾のない関係として理解しうる，可能な一つの道を示すものと思れる。と同時に経済学の研究は手段価値以上には出ないものと位置付けられることになり，所詮心の空白はこれによっても満たされるべくもない。

昭和40年代前半におけるいわゆる大学紛争とその後の大学改革のために，当時の大学関係者は研究，教育に加えて大学行政に多くの時間と労力を費さざるをえなかった。私もその例外ではなかったが，これも一段落した47，48年にわたってイギリスのケンブリッジ大学に塾派遣の留学をすることになった。当時同大学にはP・スラッファ，ジョーン・ロビンソン，N・カルドア，J・ミードをはじめとして数多くの世界的に著名な経済学者が集まっており，まことに壮観であった。それは確かに，第二次大戦後の世界の経済学のパラダイムともなっていたいわゆる新古典派の体系に対して，自分たちこそ真のケインズを継承，発展させているものという意味で，ポスト・ケインズ派，あるいはネオ・ケンブリッジ派と呼ばれる経済学のメッカであった。経済学の中心課題である価格形成理論，分配理論，資本理論，さらに循環と成長に関する動学の理論など，経済学のほとんどあらゆる分野にわたって新古典派との対決を迫っていた。確かに新古典派理論の精緻な分析方法と比較すると，見劣りする彼らの経済分析ではあったけれども，その優れた現実感覚は極めて魅力的に思われた。しかも当時は，資本理論におけるいわゆるケンブリッジ論争において，彼らの勝利が確定し，その美酒に酔いしれた余韻がなお残っており，その自信のほどはひしひしと肌身に感じられるほどであった。

ところでこの留学の収穫は何であったのか，一方では日常体験の中から異国の人びとがどんな制度の下でどんな考え方をもって日々の生活を営んでいるのか。例えば競争のような一つの行動を見ても，彼我の間には随分大きな相違があると思われた。マーシャルのフェアーな競争といった概念も日常性をもって理解できるように思われた。しかしもし日本的競争をこの国に持ち込んだとしたら，恐らくまたたく間に我が彼を制圧してしまうのではないかと思われると同時に，非常な反発と批判も起るであろうと想像された。当時はまだ今日のような貿易摩擦はなかったけれども，今日の状態は，そのよし悪しは別として，成るべくして成ったとさえ思われる。

他方に留学は研究の上でどんな成果をもたらしたであろうか。留学に先立ってポスト・ケインズ派の議論はもちろんこれを研究し，そして興味をもっていたからこそ，そのメッカの地に留学することにもなったのであるが，留学を機に彼らというよりもイギリス伝統の経済学を支えている一つの，しかし非常に重要な要素として，市場価格に対して自然価格（マルクスの生産価格）の理論があるのではないかと考えるようになった。いうまでもなくこの自然価格の理論，さらに自然価格と市場価格の関係による有効需要の原理は，スミスの「国富論」において展開されたものであり，リカード，マルクスに継承されたが，限界革命後，その成果を踏まえながら，少しく変形された形にお

いてではあるが，A・マーシャルの需要価格と供給価格の理論，そして周知のケインズの総需要価格と総供給価格の有効需要原理となって再現されていると考えられるものであり，またスラッファーの「商品による商品生産」の理論は自然価格そのものの議論にほかならない。スミス，リカード，マルクス，そしてスラッファがこの自然価格論を論じたことについては，彼らの著者に直截に現われているから明らかであるが，ネオ・ケンブリッジ派に最も深い関係をもつマーシャルやケインズの理論がこれにかかわっているというのには異論も多いことと思う。この点について，私はすでに，ケインズに関しては論究したことがあるが，マーシャルに関しても別の機会に究明するつもり（三田学会雑誌第84巻第1号）であるから，ここに詳論はしないが，通常マーシャルの均衡論はワルラスのそれと比較され，一般均衡論に対して部分均衡論であるとか，また価格調整の理論に対して，数量調整のそれであるといわれる。それらは確かにそうに違いないのであって，否定すべきことではないけれども，しかし単にそれだけでは非常に皮相的な理解であると思われる。すなわちマーシャルの需要価格は古典派の市場価格を，またその供給価格は自然価格を意味するものと解するのが適切であると思われる。それに対してみるとワルラスの議論は市場価格にのみ関するものである。またケインズの総需要価格と総供給価格はマーシャルの需要価格（＝市場価格）と供給価格（＝自然価格）に数量を乗じたものにほかならない。

以上のようにマーシャルやケインズの議論が単に需要と供給による市場価格の理論ではなく，スミス，リカード以来の自然価格に関わるものと解することが許されるならば，このスミス以来のイギリス伝統の経済学を特色づける自然価格論とは何かということが重要な問題である。自然価格とは一定の技術のもとで，任意に与えられたある産出量水準を増減することなく，丁度再生産するに足る価格を意味している。したがってたとえば企業の利潤の自然率というのは，企業が現在の一定の生産規模を正当なものとして将来にわたっても維持するような利潤率を意味する。この自然価格は個別の企業レベルでも，また個別の産業レベルでも，あるいは全産業を包括する一国経済のレベルでも，さらに今日のような国際化の進んだ時代においては世界的規模，地球全体のレベルにおいても思考されうる，あるいは思考されなければならない価格である（マーシャルの供給価格（＝自然価格）は通常新古典派でいわれる供給関数とどう異なるのかが問題になるであろう。それには利潤の理論―剰余としての利潤（マーシャルの準地代），また分配原理としての限界生産力説（マーシャルにおける純限界生産力説）など多くの論点が考慮されなければならないであろう）。

さらにこの自然価格が考えられる哲学的，思想的背景は如何なるものであるのか。それは論者において必ずしも明確ではない。ところで人間を他の動物から区別するものは何であると考えられるか。ある人たちはパスカルのように「考える葦」と考えるであろう。また他のある人たちはホモ・ファーベルとして，道具を作るものと見るであろう。これらも確かにある人間の特色を把えている。と同様にわれわれ人間だけが，他の動物と異なって，自らの生存に必要な諸資料を自らの手によって生産しているのであり，したがって人間の存続の可能性はその生存にとって必要なものを自ら再生産しうる可能性にかかっている，というのも確かなことであり，自然価格論の基礎をこのような

人間の存続に求めることは，極めて自然な，そして一つのありうべき論理的に整合的な思想であると思われる。既述のように，西田哲学では「我思う」ではなく「我行う」故に我ありという。「我思う」というのはなお単に意識的でありうるであろう。しかし「我行う」というのは単に意識的にとどまるのではなく，同時に身体的でなければならない。意識的・身体的なものとして人間の行為というものは成りたつ。人間の本質は行為にある。その行為は意識的・身体的であり，したがって人間の本質が実現されるためには少なくとも人間の身体的存在が再生産されなければならないであろう。そう考えれば「我行う」という極めて基本的なテーゼと経済学上の自然価格のテーゼを結び付けることも可能である。この論稿のはじめから述べてきたような，自分の経済学研究への偶然性に対して，あれこれと求めながらも意に満たなかった空白が，このような形で埋められ，いささかなりとも安住の地を求めることができたのではないかと思っている。もちろん他の人びとがこれをどう評価しようと自由であるけれども，少なくとも私自身にとっては，求めて，容易に得られなかったものが得られたというのが現在の心境である。

経済学の動機付けについては，自然価格論が心の充足をもたらしたとして，さらに経済分析の手法に関して，一つの疑問と求めるべき方向を述べたい。この後者の問題は直接には留学と関係はないのであるが，私は比較的若い頃から一つの趣味として囲碁を打ってきた。このゲームでは——おそらく他のいろいろなゲームにおいても類似したことがあるであろう——ある局面において，時にはこの一手しかないということもあるが，通常は若干の打つべき手というものがある。この若干の選択肢の中からどれを選ぶのも自由であるけれども，どれを選んだかによって，つぎの局面は全く異なるものになる。そこで相手はその新しい局面に応じて，また同様の選択を行うことになるのである。私は日頃，このようなゲームの進行過程はまさに人生行脚の過程，大きくいえば人類の歴史の発展過程の縮図のように思っているのであるが，そこで現代の経済学の分析の仕方をこれと比較して見よう。そこでは何らかの関数関係が前提され，静学体系においてはもちろんのこと，また動学体系においても，あるいは将来の経済予測に関しても，これらの関数そのものは変化しないものとされているのが普通である。しかし時間の過程に即して考えるとき，関数はそれほど安定したものであるのであろうか。たとえばごく卑近な例であるが，ある主婦がある日，その効用関数にしたがって，その日の夕食のメイン・ディッシュとして牛肉を選んだとしよう。選んだ食品が魚肉でなくして牛肉であったということは，つぎの日の彼女の効用関数そのものをそれなりに変化させてしまうはずである。したがってつぎの日にはこの新しい関数にしたがって新しい選択をすることになるであろう。生産の理論においても，いわゆる生産関数について，このような事態を考えることは容易である。時間（歴史的な）の経過においては，その一歩一歩がその時その所における決断であるとともに，それがつぎの時点の新しい状況を生みだし，そのもとでまた新しい決断が迫られるのである（非連続の連続としての歴史的発展である）。このような事情に対して，いわゆるゲーム理論の分析手法は非常によくこれに適応しているものと考えられ，その意味で最近とりわけ寡占理論などにおいて，このゲーム理論的手法が大いに取りいれられているのは，極めて興味ある，また望ましい方

向だと思われる。

留学から帰校して間もなくのこと，一身上の都合からある小企業の経営にたずさわらざるをえないことになった。もちろんそれは非常勤としてであったが，何十人かの社員の生活がかかっているという責任感からくる精神的圧迫は大きなものであった。二足の草鞋を穿く中で，塾外の仕事もセーブし，また塾内の役職の要請も辞退せざるをえなかったが，他方生きた実際の経済に接する機会をもつことになったことは，自分にとってメリットもまた大きかった。一瞬たりとも休むことのない心臓の動きと同じように，生きた現実の経済と，対象論理に支配された経済理論的分析の乖離は，大学を卒業して実社会の仕事に就くことになった諸君のもつ乖離感として，これをよく理解できるだけに，両者の橋渡しを如何にするかを絶えず考慮しながら教鞭もとらざるをえなくなる。たとえば経済理論が教えるように，市場価格が需要と供給に左右され，影響されるということは確かなことである。あるいはまた企業が出来るだけ大きな利潤をえようと考えることも間違いではない。しかしこれらは余りにも当り前のことであって，現実に経済活動に従事する者にとっては，何事も語っていないに等しいと思われるであろう。あるいはよく経済理論で仮定されるように，企業は極大利潤を求めるというよりも，少なくともこれだけの利潤がなければ，この事業を継続するわけにはいかないという，まさに利潤の自然率を基準にして，これを如何にして実現するかに苦心するといった方が現実的である。十二人のエコノミストがいると，十三通りの経済予測が生ずるなどと皮肉られる経済学，そして数値的な予測は別として，筋道を立てて事態を説明するものとしても，なおただ一つではない若干の筋道がありうるような経済学，そして現実との隔りを如何にして埋めるかに苦心する経済学ではあるけれども，これからもその研究，教育とその実際活動に尽くして行きたいと思っている。

以上，私のこれまでの経済学研究における遍歴の一端を回顧的に述べたのであるが，それと並んで私の慶應義塾との関わり合いの偶然性についても語るべきことは多い。しかしここではつぎの一ことを述べるにとどめよう。かつてわれわれの大先輩が結婚，夫婦の関係について語った有名な話になぞらえていえば，もし私が再びこの世に生を享け，何らかの仕事を選ばなければならないとすれば，そしてもし許されるとすれば，私は何の躊躇もなく慶應義塾に学び，義塾に奉職したいと思うということである。